

留学生 30 万人達成の「宴の後」

◆JaLSA 主催の秋の進学フェア

9月21日、都内でJaLSA主催の秋の進学フェアが都内で開催された。前回の春の進学フェアや日ごろの皆さんの努力、そして何よりも学生の努力が実ってきたのか、春に比べて少し落ち着いた雰囲気であった。もちろん、熱気がなくなったわけではない。生徒の進学先がすでに決まっいて、少し余裕が出てきたのではないかな。

昨年、『留学生 30 万人計画』が予定よりも早く達成し、また外国人の技能実習などを広く認めるようになってきている現在の状況において「日本語学校の留学生」は、ただ、働きに来ているのではなく、日本をも学びに来ている人が多い。日本語、日本語を通しての日本文化、そして日本の生活慣習、会社環境や企業風土などを、単に仕事やお金のためだけではなく、日本の「心」を学びに来ているはずである。そのような人々は日本をもっと学ぶために何をするのか。そのように考えた時、日本語学校で学んだあとの進路は、ただ何でもよいから企業や会社の役に立つことを学ぶというのではなく、「日本流」「日本人の魂」を学びに来ているために、自分の進路を選ぶ時に「やりたいこと」「自分の力を生かせるところ」を選んでいと思う。

つまり、技能実習制度など「働くだけのための制度」が改正され、充実したことによって、当然に、日本を学びたい人のためにある日本語学校の生徒たちが、自分たちと働くためだけに来た人との差別化をするようになってきている。もちろん、制度が新しくなるということは、そのことによってメリットとデメリットが生じる。考えようによってはデメリットばかりに感じるが、逆に日本語学校に学びに来る留学生の差別化ができるという考え方もある。そのようなことからか、今回の進学フェアは少し落ち着いた雰囲気であった。ここで多くの学生が次の進むべき道に進み、希望に満ちた未来をつかんでもらいたいと思う。

◆厳しくなった入国審査

しかし、落ち着いたというようなことを喜んでばかりはいられない現実もあるのだ。というのも、政府は『留学生 30 万人計画』を達成したということにより、今回の入国審査から厳しくなっているという感覚がある。

実際に数字で見ても、JaLSA が実施したアンケートによると、今回の 10 月生の学生ビザ申請と交付状況は、今までに比べてかなり厳しくなっているといても過言ではない。すでに説明会などでアンケート結果が配布されているかもしれないが、ここで数字を挙げておくと回答のあったうち、昨年度が 14,722 人のビザ申請に対して、交付が 11,241 人と 76.4%であったのに対して、今年度 10 月生では、13,163 人の申請に対して、交付が 9,549 人と 72.5%に落ちているのである。

政府が発表した『骨太の方針 2018』の中の外国人留学生に関する項目で、「悪質な仲介者による留学生の斡旋があるところに注意する」ということが書かれていることをすでに何度か指摘していると思うが、学生ビザの交付率は、政府が悪質な仲介業者がいると考えているミャンマー (51.2%→28.1%)、バングラディッシュ (55.8%→12.7%)、スリランカ (43.7%→24.7%)、ネパール (57.7%→39.2%) のような国々で軒並み下がっているのである。

実際に、これらの国々の学生は留学ビザ取得後、亡命申請をしり、あるいはあまり学校に通わずに、アルバイトばかりしているというような状況が見受けられるだけでなく、留学手続きに際しブローカーと言われる仲介業者が存在し、その業者の斡旋によって生徒が送られ、書類などをそのブローカーが管理という名の下に偽造してしまっている状況が横行していると聞く。JaLSA 加盟校においては、そのようなことを承知していながら「留学生労働者」を黙認しているところはないと考えているが、全体的にそのような傾向があり、またブローカーに任せっきりになってしまっていて、現地などでしっかりと書類の中身を見ないで入学考査を終わらせてしまうようなことも少なくないのではないか。

この数字は JaLSA のアンケートに基づくものであるが、もちろん、JaLSA 以外の学生ビザでも同様に、交付はかなり厳しくなっているとと言える。

一方、それだけではなく、一度入った留学生の在留資格更新が認められないという例も出てきている。大阪市内の観光学を教える専門学校で、今年 4 月に入学したベトナム人留学生 100 人以上に対して、在留資格の更新が認められず、学生が帰国を余儀なくされたという事例が新聞などをにぎわせている。一つには、この専門学校が定員を大幅に超過して学生を入学させてしまっており、大阪府入国管理局が是正を求めたにもかかわらず、専門学校側がそれに応じることがなかったことが理由である。しかし、それだけではなく、定員を大幅に超過したことにより、学生は満足な授業を受けることができず、そのために留学ビザでありながら毎日バイトばかりをしていて不法就労状態になっていたということも挙げられている。

学校側が授業料を目当てに定員以上の学生を入れてしまったということもあるが、一方で、留学生側も学業が本来の目的ではなく、ビザを利用して日本で働くことが目的になってしまったために、このような事態を招いたということになる。学校側と留学生側が双方ともに経営本位と出稼ぎというような形で、経済的な目的を優先してしまい、学

生の本分を見失ったために起きた悲劇であると言えるのではないか。

このように、JaLSA という日本語学校連盟だけではなく、日本全体において、留学生の入国に対して審査が厳しくなっているというばかりでなく、日本に在留している時の留学生の行動や態度も厳しく管理するという状況になってきているのである。そして、大阪の専門学校のような例があると、その事件が起きた学生の母国、今回で言えばベトナムの、これから日本で留学をすることを夢見ている学生が、厳しい審査をされてしまうということになるのである。今の世代の留学生の行動と、それを受け入れる日本語学校の態度は、そのまま将来日本に留学し、日本と母国の懸け橋になることを夢見ている若い学生たちの未来に大きく影響することになるということを実感すべきではないのか。

本人たちは、悪いことをしたから処罰されて当たり前かもしれないが、将来の若者に対しては悲劇しか残らないということになるのである。今期 10 月生のビザの交付率が悪い国々は、過去、そのような例が少なくなかったということの意味しており、また、それを繰り返してしまった我々日本側にも責任の一端があると考えざるを得ないのである。

◆留学生の未来のために

では今、我々が未来の留学生のためにできることは何であろうか。

当然に、悪質な仲介業者に頼らないで入学する学生を決めるということである。とはいえ、様々な国の学生を募集しなければならないし、また国内にも様々な学校の規模があるので、それを各学校でできるようにすることは難しい。また、豊富な資金があれば別であるが、各国にサテライト施設のようなものを作り、日本人を駐在させることも現状においてはできるはずがないのである。

どうしても現地の人に頼らざるを得ない部分があり、そうでなければ生徒の募集がままならないというようなことも出てくることもある。このような場合では「現地の担当者との連携」を密にすることというのが一つと、もう一つは、その現地の人の評判などをしっかりと聞いておかなければならないということになる。つまり、募集する各国において、募集で頼っている担当者以外にも様々な人脈を作り、また親しく付き合う人を増やしてゆかなければならないということになるのではないか。

日本人は外国に行った場合、どうしても気心の知れた人や、現地にいる日本人など同じメンバーと一緒にいることが少なくない。そのために、一つのグループにおいて評判が良いが、そのグループ全体が現地の世界から乖離してしまっているような状況が出てきてしまっている。これは何も日本語学校の募集ばかりではなく、海外で仕事をしている人や商社なども同じである。現地にいる日本人やその周辺とばかり話をしている、結局ビジネスがうまくゆかなくなってしまうということになるのである。それは、そのような日本人のグループが、現地社会の中から浮いてしまっていたり、あまり情報がなく狭い世界で完結してしまっていることが少なくないからである。中には日本の大使館

や政府の出先機関がそのような状態になってしまっている場合もあり、十分な注意が必要なのである。

では、どうしたらよいのであろうか。

例えば、現地で最終的には自分で審査し、任せっきりにしないとか、現地の担当者や政府の人々と話をするなど、様々な面でできることがあるのではないか。実際に、そのようにしている学校は事件が少ないし、また事件が少ないということが学校そのものの信用につながっているのではないか。そして入学する学生に対して、またその家族に対して「愛情をもって接する」ということが重要である。「愛情をもって接する」とは、なんでも甘やかすことではなく、できないことに対しては厳しく指導することこそ本当の愛情であり、そのことが将来の信用につながるのではなかろうか。

JaLSA の進学フェアは、ある意味で日本語学校に通っている生徒を受け入れる学校を探すことであり、すでに日本の人々の内情を理解している人を受け入れる大学や専門学校であるということなので、当然に、進学フェアの雰囲気が落ち着いていておかしくはない。

一方で、留学生ビザ交付ということに関して言えば、彼ら留学生がそれまでにどれくらい日本を好きか、日本を知りたい、勉強したいという希望が強いかということが必要なことであるし、また、そのことを受ける日本語学校側がその希望を受け止める感受性が強いかどうかということにほかならない。人間はコミュニケーションによって様々な「化学変化」を起こすが、その変化で日本を好きになってもらうことこそ、第一歩ではないか。

そのような若い留学生や、これから留学しようとしている人々の芽を摘んではならないのである。